『ラクシュミー・タントラ』における創造説とグナ（性質）

三澤祐嗣

1　はじめに

『ラクシュミー・タントラ』（*Lakṣmītantra*、略号：LT）[*1]は、パーンチャラートラ派[*2]の主要な文献の一つであり、およそ 9 世紀から 12 世紀の間に編纂されたとされる。この書の主要なテーマの一つはパーンチャラートラ派独自の哲学と宇宙論であり、様々な思想を自由に取り入れ、折衷している。そして、様々な要素を統合するものとして、ヴィシュヌ派における母なる女神ラクシュミーのシャクティ（宇宙の根源力）を最高の形而上学的原理に据えようとしているところにこの書の特徴が現れている。LT の創造説では、他のパーンチャラートラ派の文献と同じく、神的な創造は「清浄な創造」（śuddhasṛṣṭi）、現象世界の創造は「不浄な創造」（śuddhetarasṛṣṭi）とされ、さらに神話的なものと形而上学的な諸原理の展開が複雑に混交し説かれる。その中で、グナ（guṇa）と呼ばれるものが度々登場する。性質、属性などを意味するこの語は、特に 3 種のグナと呼ばれる場合は、サーンキヤ説などで世界を多様化する構成要素的かつ心的なものを司る属性的なものとして説かれる。一方、LT では創造説の様々なところで登場し、それぞれの段階において異なる意味を持つ。

そこで本稿では、LT における創造説において登場するグナについて、整理し、まとめることを試みた。

[*1] Krishnamacharya 氏により校訂されたものが出版されており、本稿もこれを使用した [Krishnamacharya 1959]。LT の翻訳としては、唯一の英訳が Gupta 氏により発表されている [Gupta 2000]。同書には LT の概略ついても述べられている。日本語部分訳については拙稿（[三澤 2015] 補遺、[三澤 2017]、[三澤 2018]）を参照のこと。

[*2] パーンチャラートラ派は、ヒンドゥー教の主要な教義の一つであるヴィシュヌ派の一派であり、そのヴィシュヌ派の中でも、最も早期に成立したものの一つである。パーンチャラートラ派は、タントラ的な要素を取り入れ、ナーラーヤナとしてのヴィシュヌ、及び神妃ラクシュミーを崇拝し、教義上 108 の聖典があるとされる。この派は、*Mahābhārata* にも登場し、サーンキヤ思想などとも関係が深いものとして説かれている。ヴィシュヌ派の教理はこのパーンチャラートラ派に基づくとされ、パーンチャラートラ派自体は衰退したが、現在でも続くシュリー・ヴァイシュナヴァ派へと影響を与えるなど、後代への影響は疑いなく大きい。パーンチャラートラ派の概要については Rastelli 氏が簡潔にまとめている [Rastelli 2009]。また、宇宙論については Schrader 氏が *Ahirbudhnyasaṃhitā* を中心に LT を援用しつつ論じている [Schrader 1916]。パーンチャラートラ派の歴史的経緯については松原氏 [Matsubara 1994] や Gonda 氏 [Gonda 1977] が詳しい。日本語のものとしては引田氏により出版されており、特に儀礼について論じている [引田 1997]。

2　神的な 6 つのグナ

第 2 章では、「清浄な創造」（śuddhasṛṣṭi）として、最高存在からの展開が説かれる[*3]。そこで、6 つのグナ（ṣāḍguṇya）が登場する。

> nistaraṅgāmṛtāmbhodhikalpaṃ ṣāḍguṇyam ujjvalam /
> ekaṃ taccidghanaṃ śāntam udayāstamayojjhitam // LT 2.10
> 〔ブラフマンは〕凪いだアムリタ（不死の霊薬）の海と等しいものであり、6 つのグナが集合したものであり、輝くものである、その唯一の最高精神（cidghana）は、静寂であり、生起と消滅から離れている。

ここでは、前偈（LT 2.9）においてラクシュミーとブラフマンの同一性が説かれた後、この 10 偈によって、そのブラフマンに 6 つのグナ（ṣāḍguṇya）が帰せられていることが分かる。このブラフマンはラクシュミー・ナーラーヤナとも同一視されている[*4]が、おそらくそれぞれ別の在り方を表していると思われる[*5]。ブラフマーは 6 つのグナの集合体、すなわち、6 つのグナの性質を全て備えているということになろう。6 つのグナがそれぞれどのようなものかは次のようにまとめられる。

1. 知識（jñāna）: 全てを知るものであり、全てを見るもの。[*6]
2. 自在力（aiśvarya）: 自由自在に世界を創造する力、意欲。このために彼女の創造は妨げられない[*7]。
3. 潜在力（śakti）: 世界の物質的根源（prakṛti）、シャクティによって、女神は世界の根源（prakṛti）となる。[*8]
4. 力（bala）: 維持する力、結果（創造されたもの＝世界）を維持する。女神は「力」（bala）に

[*3] 第 2 章の創造説については、拙稿 [三澤 2015] 第 6 章第 2 節を参照。

[*4] lakṣmīnārāyaṇākhyātam ato brahma sanātanam / LT 2.16ab
それ故、永遠なるブラフマンをラクシュミー・ナーラーヤナと呼ぶ。

[*5] すなわち、「わたしという実在」や本体であるナーラーヤナ、「わたし性」や状態であるラクシュミー、創造者としてのブラフマーである。

[*6] jñānātmikā tathāhaṃtā sarvajñā sarvadarśinī / LT 2.25ab
同様に、「わたし性」（ahaṃtā）の「知識」（jñāna）の本質は、全てを知るものであり、全てを見るものである。

[*7] avyāhatir yad udyatyās tad aiśvaryaṃ paraṃ mama /
iccheti socyate tattattattvaśāstreṣu paṇḍitaiḥ // LT 2.28
生起する（udyatī）〔わたし〕は妨げられない（avyāhati）、それがわたしの最高の自在力（aiśvarya）である。それは意欲（icchā）であると、あらゆる真理〔が説かれる〕シャーストラ（聖典）において、賢者たちによって語られている。

[*8] jagatprakṛtibhāvo me yaḥ sā śaktir itīryate / LT 2.29ab
世界の物質的根源（prakṛti）としてのわたしの状態が「潜在力」（śakti）であると言われている。
Krishnamacharya 氏の註 :「女神による世界のプラクリティの状態は、自己の本質ではないから、その状態のように、変化しうる性質を付加される故に。それにもかかわらず、自己のあり方が実在する知と無知であるアートマンによって、と理解されるべきである。なぜなら、まさにこの彼女は、ブラフマンから世界のプラクリティというものに帰着するからである。」（“devyā jagatprakṛtibhāvo na svarūpataḥ, tathātve vikāritvaprasaṅgāt. kiṃtu svaprakārahūtacidacidātmaneti draṣṭavyam. eṣaiva hi brahmaṇo jagatprakṛtitve gatiḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 8]）

よって何の労もなく世界を創造する。潜在力（śakti）の部分。[*9]

5. 勇猛さ（vīrya）: 潜在力（śakti）が変異しないこと（不変化力）、自在力（aiśvarya）の部分。[*10]
6. 光輝（tejas）: 独存力（協力者を必要としない力）、他者を支配下に置く能力（他者支配力）。[*11]

以上のように、第 2 章で登場する 6 つのグナは、「清浄な創造」（śuddhasr̥ṣṭi）の段階において存在し、ラクシュミー・ナーラーヤナに帰される神的な属性を意味する。そのため本稿では「神的な 6 つのグナ」と呼称する。

さらに、Gupta 氏が説明するとおり[*12]、これらのうち、「知識」（jñāna）が最も本質的なものとして、他の 5 つよりも優位にあるように説かれる[*13]。

一方、LT では、シャクティが重要なものとして説かれる。「神的な 6 つのグナ」の中にシャクティがあるが、ラクシュミーもまたシャクティと呼ばれるのである。しかし、そのため、シャクティにはおそらく 2 つの側面があると考えられる。ラクシュミーそのものとしてのシャクティ（宇宙の根源力）と「神的な 6 つのグナ」の一つとしてのシャクティ（「潜在力」）である。

[*9] sr̥jantyā yac chramābhāvo mama tad balam iṣyate // LT 2.29cd
bharaṇaṃ yac ca kāryasya balaṃ tac ca pracakṣate /
śaktyaṃśakena tat prāhur bharaṇaṃ tattvakobidāḥ // LT 2.30
わたしは創造しながらも疲れることはない、それが「力」（bala）であると考えられている。結果（創造されたもの）の維持、それもまた「力」（bala）と言っている。真理を体得した者たちは、その維持を「潜在力」（śakti）の部分として説明する。

[*10] vikāraviraho vīryaṃ prakr̥titve 'pi me sadā / LT 2.31ab
わたしは世界の物質的根源（prakr̥ti）であるけれども、常に変異しない（変異から離れている）、〔それが〕「勇猛さ」（vīrya）である。jagadbhāve 'pi sā nāsti vikr̥tir mama nityadā /
vikāraviraho vīryam atas tattvavidāṃ matam // LT 2.32
しかし、世界の存在において（世界が出現しても）、わたしにとってそれ（シャクティ）は永遠に変化しない。それ故、変異しない（変異から離れている）ことが「勇猛さ」（vīrya）であると、真理を知る者たちは理解している。vikramaḥ kathito vīryam aiśvaryāṃśaḥ sa tu smr̥taḥ / LT 2.33ab
「勇猛さ」（vīrya）は勇敢さ（vikrama）であると語られ、さらに、それは「自在力」（aiśvarya）の部分（要素）であるとも言われる。

[*11] sahakāryanapekṣā me sarvakāryavidhau hi yā // LT 2.33cd
tejaḥ ṣaṣṭhaṃ guṇaṃ prāhus tam imaṃ tattvavedinaḥ /
parābhibhavasāmarthyaṃ tejaḥ kecit pracakṣate // LT 2.34
わたしはあらゆる行為の法則において共に行動するもの（sahakārin）とは関わりがない。これこそを 6 番目のグナ（属性）である「光輝」（tejas）であると、真理を知る者たちは言う。「光輝」（tejas）は、他者を支配下に置く能力であると、ある者たちは述べる。

[*12] [Gupta 2000: p. 10]

[*13] śeṣam aiśvaryavīryādi jñānadharmaḥ sanātanaḥ /
aham ity āntaraṃ rūpaṃ jñānarūpam udīryate // LT 2.26
他の「自在力」（aiśvarya）や「勇猛さ」（vīrya）などは「知識」（jñāna）の特質（属性、dharma）であり、永遠である。「知識」（jñāna）の形態は、わたし（aham）という固有の形態であると言われている。
aiśvarye yojayanty eke tattejas tattvakovidāḥ /
iti pañca guṇā ete jñānasya srutayo 'malāḥ // LT 2.35
真理を体得した者たちの一部は、その「光輝」（tejas）を「自在力」（aiśvarya）に結びつける。これら 5 つのグナ（属性）が、「知識」（jñāna）の清浄なる流出（sruti）である。

2.1　神的な 6 つのグナとヴューハ神の関係

「神的な 6 つのグナ」は、創造説において、ヴューハ神*14と呼ばれる 4 神（あるいは 3 神）が段階的に顕現する*15ところで、重要な役割を担う。この段階的な顕現とは、ヴァースデーヴァ→サンカルシャナ→プラディユムナ→アニルッダが順次展開することであり、その際に、それぞれ、「神的な 6 つのグナ」を全て組み合わせたものが 1 組、「神的な 6 つのグナ」が 2 つずつ組み合わさったものが 3 組となり、それぞれの神の属性として配置される。それは次のように説かれる。

> tatra tadguṇayugmaṃ tu mama rūpatayocyate /
> ato jñānabale devaḥ saṃkarṣaṇa udīryate // LT 2.53
> aiśvaryavīrye pradyumno ’ niruddha śaktitejasī / LT 2.54ab
> さて、そこにおいて、そのグナの一対（組み合わせ）が、わたしにとって形態性（形あるもの）として、語られる。それ故、「知識」（jñāna）と「力」（bala）〔の組み合わせ〕である神は、サンカルシャナと述べられる。「自在力」（aiśvarya）と「勇猛さ」（vīrya）〔の組み合わせ〕がプラディユムナであり、「潜在力」（śakti）と「光輝」（tejas）〔の組み合わせ〕はアニルッダである。

ヴァースデーヴァは、未だはっきりと現れていないため、形象を有しておらず、「神的な 6 つのグナ」をすべて有し、ブラフマンと不可分である*16。ヴューハ神とグナの配置をまとめると次のようになる。

- ヴァースデーヴァ :「知識」（jñāna）・「自在力」（aiśvarya）・潜在力（śakti）・「力」（bala）・「勇猛さ」（vīrya）・光輝（tejas）

---

*14 サンカルシャナは別名バラバドラとも呼ばれ、ヴァースデーヴァの兄である。また、プラディユムナとアニルッダはそれぞれヴァースデーヴァの息子と孫である。ヴューハの神格は、上記の 4 名にサーンバを足した、ヴリシュニ族の 5 人の英雄が元になっているとされるが、いつのころからかサーンバは除外され、ヴァースデーヴァを頂点とするヴューハが形成されたという [Rastelli 2009: p. 444]。

*15 Gupta 氏はヴューハについて、「清浄なる創造と不浄なる創造の間の違いは、3 つの現象の属性、サットヴァ、ラジャス、タマスが、清浄なる創造において存在していないのであり、その清浄なる創造は時折 nityavibhūti と呼ばれ、反対に不浄なる創造は līlāvibhūti と名付けられる。前者は 4 つの顕現（caturmūrti あるいは caturvyūha）から成る。これら 4 つの顕現（ヴューハ）の最初（すなわちヴァースデーヴァ）において、属性は休止状態であり、それ故、うっすらと顕現しているのみである。顕現が進行するにつれ、それらはより輝き、深淵となる。」と説明している [Gupta 2000: p. 11]。

*16 ここでは、4 ヴューハ神の中で最初のものがヴァースデーヴァと明言されていないが、ナーラーヤナの異名やブラフマンあるいはアートマンと同一視されているため、6 つの属性を全て備えていると思われる。
yena bhāvena bhavati vāsudevaḥ sanātanaḥ /
bhavatas tasya devasya sa bhāvo ’ham itīritā // LT 2.14
その存在するものとしての神にとって、その（神の）状態は、わたし（aham）と言われている。その状態によって永遠なるヴァースデーヴァが存在してる。
lakṣmīnārāyaṇākhyātam ato brahma sanātanam /
ahamtayā samākrānto hy ahamarthaḥ prasidhyati // LT 2.16 それ故、永遠なるブラフマンをラクシュミー・ナーラーヤナと呼ぶ。なぜなら、「わたし性」（ahaṃtā）によって遍満され、「わたしという実在」（ahamartha）が完成するから。

- サンカルシャナ：「知識」（jñāna）・「力」（bala）[*17]
- プラディユムナ：「自在力」（aiśvarya）・「勇猛さ」（vīrya）[*18]
- アニルッダ：潜在力（śakti）・光輝（tejas）[*19]

2.2　神的な 6 つのグナの 2 種の分類

また、「神的な 6 つのグナ」には、2 種の分類が存在し、「自性」（svabhāva）と「3 つのグナ」（guṇatraya）と呼ばれる。「3 つのグナ」（guṇatraya）それぞれが「自性」（svabhāva）から流出（upasarjana）し、両者から 1 つずつを有して一対の組み合わせを形成する。それらをまとめると次のようになる[*20]（前者が「自性」、後者が「3 つのグナ」）。

- 「知識」（jñāna） → 「力」（bala）
- 「自在力」（aiśvarya） → 「勇猛さ」（vīrya）
- 「潜在力」（śakti） → 「光輝」（tejas）

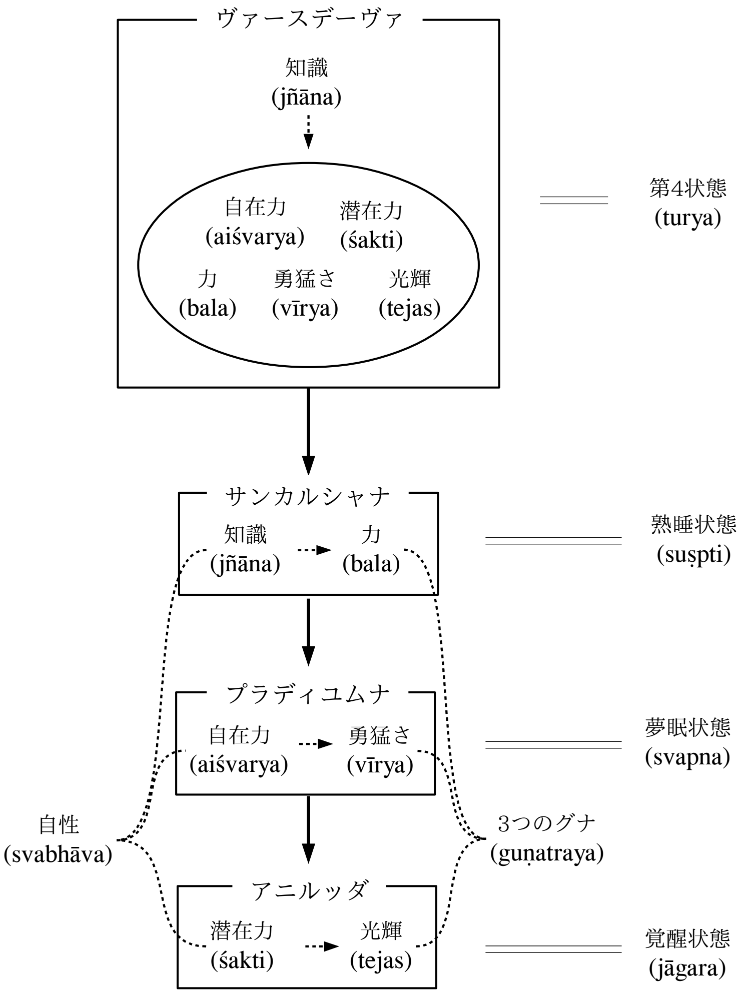
以上のように、「神的な 6 つのグナ」は「清浄な創造」（śuddhasṛṣṭi）において、ヴューハ神と関連して説かれる。これらの関係性は図表 1 のとおりにまとめることができる。

[*17] vyaktajñānabalākhyāyāṃ pūrvaṃ saṃkarṣaṇātmani /
tilakālakavat sarvo vikāro mayi tiṣṭhati // LT 2.45
tan māṃ saṃkarṣaṇātmānaṃ vidur jñānabale budhāḥ / LT 2.46ab
まずはじめに、わたしの「知識」（jñāna）と「力」（bala）の顕現と呼ばれるサンカルシャナの本質（アートマン）の中に、（皮膚の下の）ほくろのごとくに、すべての変異（vikāra）が存在する。かのわたしであるサンカルシャナの本質を、「知識」（jñāna）と「力」（bala）であると、知者たちは認識する。

[*18] svayaṃ gṛhṇāmi kartṛtvam unmiṣantī tataḥ param // LT 2.46cd pradyumna iti māṃ āhuḥ sarvārthadyotanīṃ tadā / yugaṃ prasphuritaṃ rūpaṃ tasminn aiśvaryavīryayoḥ // LT 2.47 それから、〔わたしは〕開眼（顕現）しつつ、作者性を自らに獲得する。その時、すべての対象を輝かせるわたしをプラディユムナと言う。そこにおいて、「自在力」（aiśvarya）と「勇猛さ」（vīrya）の組み合わせの形態が現れる。

[*19] tatas tayā kriyāśaktyā labdhāveśā cikīrṣayā / yujyamānāniruddhākhyāṃ lambhitā tattvakovidaiḥ // LT 2.48 それから、その活動力（kriyāśakti）によって浸透され、〔また〕活動の意欲と結びついたものがアニルッダという名称で真理を体得した者たちによって呼ばれる。

[*20] tisro mama svabhāvākhyā vijñānaiśvaryaśaktayaḥ // LT 2.49cd unmiṣantyaḥ pṛthaktattvatrayeṇa parikīrtitāḥ / LT 2.50ab 3 つのわたしの自性（svabhāva）と呼ばれるものは、「知識」（vijñāna ＝ jñāna）、「自在力」（aiśvarya）、「潜在力」（śakti）である。〔それらの自性は〕開眼（顕現）しつつあり、原理（tattva）の 3 種の区分として言及される。balaṃ vīryaṃ tathā teja ity etat tu guṇatrayam // LT 2.50cd śramādyavadyābhāvākhyaṃ jñānāder upasarjanam / itthaṃ śāntoditāvasthādvayabhedajuṣo mama // LT 2.51 他方、「力」（bala）、「勇猛さ」（vīrya）、そして「光輝」（tejas）というこの 3 つのグナ（guṇatraya）がある。〔それら 3 つのグナ（属性）は〕疲労などの不完全さは存在せず、知識（jñāna）などの流出（upasarjana）である。このように、わたしにとって、平安なるものから生起した状態は 2 種の区別を持つものである。



図表 1　ヴューハ神の展開と神的な 6 つのグナ

3　3 つのグナから成るもの

LT 第 3 章では、「神的な 6 つのグナ」と別のグナが現れる。それらがサットヴァ、ラジャス、タマスという「3 つのグナから成るもの」（traiguṇya）である。これらの「3 つのグナから成るもの」は、先にあげた「自性」と関連する。「自性」は、「清浄な創造」の段階において登場するものであり、「3 つのグナから成るもの」とは明確に区別される*21。「3 つのグナから成るもの」は創造・維

*21 adhiṣṭhāya guṇān sṛṣṭisthitisaṃhṛtikāriṇī / nirguṇāpi guṇān etān adhiṣṭhāyātmavāñchayā // LT 3.9 cakraṃ pravartayāmy ekā sṛṣṭisthityantarūpakam / LT 3.10ab 創造・維持・還滅を行う者〔であるわたし〕は、諸々のグナを支配し、また、グナを持たない者〔であるわたし〕は、自分の望みによって、これら諸々のグナを支配する。そして、唯一なるわたし（ラクシュミー）は、創造、維持、還滅（終わりを形作るもの）の循環（チャクラ）を廻らす。創造・維持・還滅を行う者（sṛṣṭisthitisaṃhṛtikāriṇī）とは、これらの循環を支配し、それらを超えた存在であることが示唆されて

持・還滅を司り、「不浄な創造」の段階、すなわち現象世界の創造において現れる。それぞれの関連性は次の通りである*22。また、これは第 4 章でも同じく説かれる*23。

- 「知識」(jñāna) → サットヴァ → 維持
- 「自在力」(aiśvarya) → ラジャス → 創造
- 「潜在力」(śakti) → タマス → 還滅

4 3 つのグナから成るものと 3 女神

LT 第 4 章、第 5 章においては、「3 つのグナから成るもの」が創造説の中で女神と関連して説かれる。「3 つのグナから成るもの」がそれぞれ優勢になった状態としての女神が説かれる。それら

いる。また、グナを持たない者(nirguṇā)とは、ここでのグナはサットヴァ、ラジャス、タマスからなる 3 種のグナという物質的要素の機能を有するものであり、それを持たないということはプルシャの機能をも示唆している。Krishnamacharya の註には、「〈また、グナを持たない者〔であるわたし〕は〉(“nirguṇāpi”)とは。すでに 6 つのグナに関して言われたことから、グナかを持たない(nirguṇa)という語とはサットヴァ、ラジャス、タマスの形態(性質)が混ざったグナから離れているという意味である」(“nirguṇāpīti. pūrvaṃ ṣāḍguṇyasyoktatvāt atra nirguṇapadasya sattvarajastamorūpamiśraguṇarahitety arthaḥ.” [Krishnamacharya 1959: p. 11])と説明される。これらはいずれもラクシュミーのことであり、本来ヴィシュヌが持つ最高神の機能がラクシュミーに帰されているのである。acicchaktir jaḍāpy evam aśuddhā pariṇāminī / triguṇāpi mamaivedaṃ svācchandyāt pravijṛmbhitam // LT 3.27 また、「無知としてのシャクティ」(acit-śakti)は、同様に、理性なきものであり、不浄であり、転変するものであり、さらに 3 種のグナ〔から成るもの〕である。〔しかし〕まさにわたしのこれは、自身の意欲(svācchandya)により、伸張したもの(遍く広がったもの=顕現したもの)である。

*22 svasvātantryavaśenaiva vibhāgas tatra vartate /
vijñānaiśvaryaśaktyātmā vibhāgo yaḥ sa īritaḥ // LT 3.3
自己の意欲(svātantrya、独立性)によってのみ、〔グナの〕区別(vibhāga)は、そこに生じる。〔グナの〕区別は、「知識」(vijñāna = jñāna)、「自在力」(aiśvarya)、「潜在力」(śakti)から成るということ、それが言われた。
vijñānaiśvaryaśaktīnām unmeṣas tv aparo ’dhunā /
atarkyāyā mamodyatyā niyogānarhayā sadā // LT 3.4
icchayānyat kṛtaṃ rūpam āsīj jñānādike trike / LT 3.5ab
しかし、今、開眼(unmeṣa)は、「知識」(vijñāna = jñāna)、「自在力」(aiśvarya)、「潜在力」(śakti)とは別である。常に、推し量れない者であるわたしの自由自在な生起(創造)の意欲(icchā)によって作られた別の形態は、「知識」(jñāna)などの 3 種の中に存在する。
yathaivekṣurasaḥ svaccho guḍatvaṃ pratipadyate // LT 3.5cd tadvat svaccham ayaṃ jñānaṃ sattvatāṃ pratipadyate / rajastvaṃ ca mamaiśvaryaṃ tamastvaṃ śaktir apy uta // LT 3.6 まさに、澄んだサトウキビの汁が糖蜜性を獲得するように。そのように、この澄んだ「知識」(jñāna)は、サットヴァ性を獲得する。そして、わたしの「自在力」(aiśvarya)はラジャス性を、そしてまた〔わたしの〕「潜在力」(śakti)はタマス性を〔獲得する〕。ete trayo guṇāḥ śakra traiguṇyam iti śabdyate / rajaḥpradhānaṃ tat sṛṣṭau traiguṇyaṃ parivartate // LT 3.7 シャクラよ。これら 3 つのグナは、3 つのグナから成るもの(traiguṇya)と呼ばれる。その 3 つのグナから成るもの(traiguṇya)は、創造において、ラジャスが第 1 のもの(優勢)となる。sthitau sattvapradhānaṃ tat saṃhṛtau tu tamomukham / ahaṃ saṃvinmayī pūrvā vyāpiny api puraṃdara // LT 3.8 それ(3 つのグナから成るもの)は、維持において、サットヴァが第 1 のもの(優勢)に、一方、還滅において、タマスが前面(優勢)に〔なる〕。わたしは、「知」(saṃvid)からできている者であり、最初の者であり、遍充する者である。プランダラ(城塞の破壊者=インドラ)よ。

*23 yat te jñānaṃ purā proktaṃ tat sattvena vivartate /
rajastayā tadaiśvarya(ṃ) śaktiś cāpi tamastayā // LT 4.33
以前にあなた(=インドラ)に語った「知識」(jñāna)というものが、サットヴァとして転変する。かの「自在力」(aiśvarya)はラジャス性のものとして、そしてまた、「潜在力」(śakti)はタマス性のものとして〔転変する〕。

は次のように説かれる 。

> rajaḥpradhānā tatrāhaṃ mahāśrīḥ parameśvarī /
> madīyaṃ yat tamorūpaṃ mahāmāyeti sā smṛtā // LT 5.4
> madīyaṃ sattvarūpaṃ yan mahāvidyeti sā smṛtā / LT 5.5ab
> その中で、ラジャスが優勢である〔場合の〕わたしは、マハーシュリーであり、パラメーシュヴァリーである。わたし自身がタマスの形を取ることにより、それはマハーマーヤーであると言われる。わたし自身がサットヴァの形を取ることにより、それはマハーヴィディヤーであると言われる。

すなわち、

- ラジャス性 → マハーシュリー
- サットヴァ性 → マハーヴィディヤー
- タマス性 → マハーマーヤー

となる*[24]。この 3 女神を統括するものとして、マハーラクシュミーが説かれる。

> anujjhitasvarūpāhaṃ madīyenālpabindunā /
> mahālakṣmīḥ samākhyātā traiguṇyaparivartinī // LT 5.3 わたしは、不変の（減少することのない）自性を持ちつつ、自身の極微なもの*[25]として、マハーラクシュミーと呼ばれ*[26]、〔また〕3 種のグナからなるもの（traiguṇya）を展開する者である。

マハーラクシュミーは、世界を創造する際に顕れる姿であり、「3 つのグナから成るもの」を有し、それらを支配するものとして説かれる*[27]。3 種のグナのうちラジャスが最初に説かれたり、マハー

*24 Krishnamacharya 氏の註釈では、次のように説明される。「ここでは、〔ラクシュミーは〕平安な状態である。第 2 シュローカでは、生起の状態である。第 3 シュローカでは、3 つのグナからなる状態であり、〔それは〕マハーラクシュミーと呼ばれる。第 4〔シュローカ〕では、ラジャスが優勢の状態であり、マハーシュリーであり、マハーラクシュミーの次の展開である。タマスが優勢であることによって、前の章で言われたマハーマーヤー〔となる〕。第 5〔シュローカ〕では、前の章で言われたサットヴァが優勢なマハーヴィディヤーである。」（“atra śāntāvasthā. dvitīyaśloke uditāvasthā. tṛtīyaśloke traiguṇyāvasthā mahālakṣmīsamākhyā. caturthe rajaḥpradhānāvasthā mahāśrīḥ mahālakṣmyaparaparyāyā. tamaḥpradhānatayā pūrvādhyāyoktā mahāmāyā. pañcame pūrvādhyāyoktasattvapradhānā mahāvidyā.”[Krishnamacharya 1959: p. 18]）

*25 LT 4.35 によると、ラクシュミーは数千万の部分から成るものとされる。

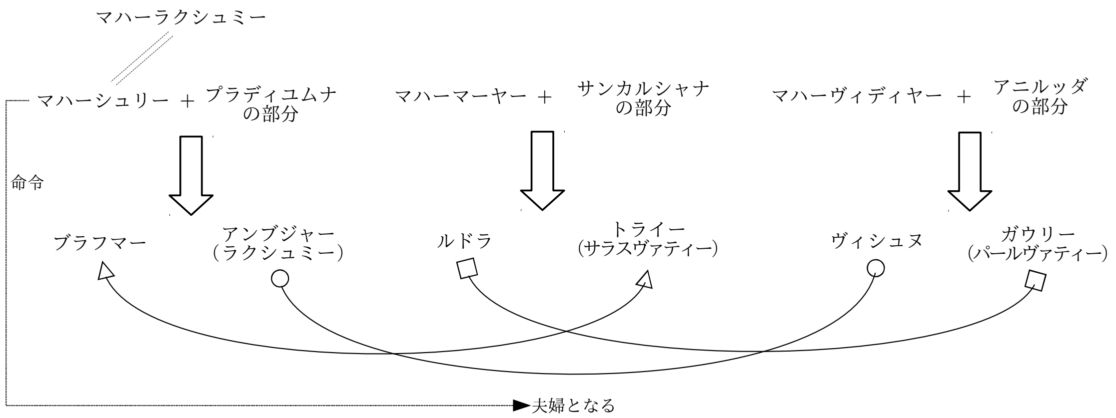
*26 不変の自性を持ちつつ、マハーラクシュミーと呼ばれることから、本質は変わらずに、転変するということである

*27 LT 第 4 章によるとマハーラクシュミーとは、世界を創造する際に顕れる姿であり、3 種のグナを有する。また、その第 4 章では、6 つのグナの内、知識（jñāna）からサットヴァが、自在力（aiśvarya）からラジャスが、潜在力（śakti）からタマスが生起するとされる。また、3 種のグナがそれぞれ優勢になったものとして、サットヴァ性のマハーヴィディヤー、ラジャス性のマハーシュリー、タマス性のマハーマーヤーが、次の LT 5.4 - 5 において説かれ、LT 5.1 における Krishnamacharya 氏の註釈でも、ラジャス性のマハーシュリーとマハーラクシュミーとは別の存在であると考えられている。しかし、LT 4.36 によると創造においてはラジャスが優勢になるとされ、さらに LT 4.39 では、マハーシュリーはマハーラクシュミーの異名とされる。おそらく 3 種のグナを有する女神の形態としては同性質ではあるが、その現れ方の違いを示している者と思われる。

シュリーとマハーラクシュミーが同一視されたりと、ラジャスが重要視されていることが見て取れる。それは、活動や刺激の性質であるラジャスが、創造において重要な役割を担っているためと考えられる。

5　3 女神とヴューハ神

この 3 女神は、ヴューハ神の部分と共に、男性神と女性神の組み合わせをそれぞれ顕現させる。それらは、創造・維持・破壊を司る神とその神妃たちである。それらは図表 2 のようになる。



図表 2　LT 5 : 3 女神の展開

■マハーシュリーとプラディユムナの部分　[*28]LT 5.9; 11 から類推できるように、マハーシュリーを根源とし、プラディユムナの部分から生まれる組み合わせが、精神性のものであり、黄金の胎児（hiraṇyagarbha）などと呼ばれるのである。根源となる 2 神は、共にラジャスと関係がある。ヴューハ神の 1 柱であるプラディユムナは、「自在力」（aiśvarya）と「勇猛さ（vīrya）」を有するが「自在力」（aiśvarya）はラジャスに転変し、一方、マハーシュリーは女神におけるラジャス性が優勢になった姿である。Gupta 氏は「マハーシュリーとプラディユムナはヒラニヤガルバと呼ばれるこの組み合わせの親（根源）である。そしてそれらはその親（根源）の特質を保持している」と説明する[*29]。

[*28] madīyaṃ mithunaṃ yat tan mānasaṃ rucirākṛti // LT 5.6
わたし（ラジャス性のマハーシュリー）の組み合わせというもの、それは精神性のものであり、壮麗なる形態である。
hiraṇyagarbhaṃ padmākṣaṃ sundaraṃ kamalāsanam /
pradyumnāṃśād idaṃ viddhi saṃbhūtaṃ mayi mānasam // LT 5.7
〔その組み合わせとは〕黄金の胎児（hiraṇyagarbha）、蓮華の目（padmākṣa）、凛々しいもの（sundara）、蓮華に座すもの（kamalāsana）であり、これを、わたし（マハーシュリー）における精神性のものであり、プラディユムナの部分から生まれるものと知れ。

[*29] [Gupta 2000: p. 27]

■マハーマーヤーとサンカルシャナの部分　[*30]ヴューハ神のサンカルシャナは、「知識」（jñāna）と「力」（bala）の属性を有し、「知識」（jñāna）はサットヴァに転変する。しかし、マハーマーヤーはタマス性の姿であるため、サットヴァとタマスの組み合わせとなる。この 2 神から生まれる男性神と女性神の組み合わせは、3 つ目のもの（trinetra）、美しい全身を持つもの（cārusarvāṅga）、精神性のものと呼ばれ、マハーマーヤーがタマス性であることから、男性神は破壊を司るシヴァに帰される。一方の女性神はトライーで、創造神のブラフマーの神妃であるサラスヴァティーのことである。

■マハーヴィディヤーとアニルッダの部分　[*32]ヴューハ神のアニルッダは、「潜在力」（śakti）と「光輝」（tejas）の属性を有し、「潜在力」（śakti）はタマスに転変する。一方のマハーヴィディヤーはサットヴァ性である。そのため、サットヴァとタマスに関連する。そこから生まれる男性神と女性神の組み合わせは、精神性のものと呼ばれのみである。そして、マハーヴィディヤーがサットヴァ性であるため、男性神は維持を司るヴィシュヌである。一方の女性神はガウリー、すなわち破壊神シヴァの神妃であるパールヴァティーである。

そして、LT 5.13cd–14ab によると男性神と女性神から成る 2 神ずつの 3 組が、神話に倣った夫婦になるのである[*33]。

女神とヴューハ神、そして 3 種のグナと創造・維持・破壊の神々が関連して説かれている。以上

[*30] saṃkarṣaṇāṃśato dvandvaṃ mahāmāyāsamudbhavam /
trinetraṃ cārusarvāṅgaṃ mānasaṃ tatra yaḥ pumān // LT 5.9
sa rudraḥ śaṃkaraḥ sthāṇuḥ kapardī ca trilocanaḥ /
tatra trayīśvarā bhāṣā vidyā caivākṣarā tathā // LT 5.10
kāmadhenuś ca vijñeyā sā strī gauś ca sarasvatī / LT 5.11ab
サンカルシャナの部分から〔生まれ〕、マハーマーヤー（タマス性）を根源とする組み合わせは、3 つ目のもの（trinetra）、美しい全身を持つもの（cārusarvāṅga）であり、精神性のものである。そこにおいて男性（puṃs）であるもの、それは、ルドラ（rudra、咆えるもの）、シャンカラ（śaṃkara、吉兆のもの）、スターヌ（sthāṇu、堅固なもの）、カパルディー（kapardī、螺髪のもの）、トリローチャナ（trilocana、3 つの目を持つもの）である。そこにおいて〔女性は〕、トライー（trayī、幸せな女性）、イーシュヴァラー（īśvarā、主宰するもの）、バーシャー（bhāṣā、言葉）、ヴィディヤー（vidyā、知）[*31]、そしてアクシャラー（akṣarā、不滅なるもの）であり、さらにその女性（strī）は、カーマデーヌ（kāmadhenu、如意牛）、ゴー（go、雌牛）、サラスヴァティー（sarasvatī）であると知られるべきである。

[*32] aniruddhāṃśasaṃbhūtaṃ mahāvidyāsamudbhavam // LT 5.11cd
mithunaṃ mānasaṃ yat tat puruṣas tatra keśavaḥ /
viṣṇuḥ kṛṣṇo hṛṣīkeśo vāsudevo janārdanaḥ // LT 5.12
umā gaurī satī caṇḍā tatra strī subhagā satī / LT 5.13ab
アニルッダの部分から生まれ、〔そして〕マハーヴィディヤー（サットヴァ性）を根源とする組み合わせは、精神性のものであるから、まさにそこにおいて男性（puruṣa）は、ケーシャヴァ（keśava、豊かな髪を持つもの）、ヴィシュヌ（viṣṇu）、クリシュナ（kṛṣṇa）、フリシーケーシャ（hṛṣīkeśa、感覚器官を統御するもの）、ヴァースデーヴァ（vāsudeva）、ジャナールダナ（janārdana、人々を乱すもの）である。〔他方〕そこにおいて、ウマー（umā）、ガウリー（gaurī、白く輝くもの）、サティー（satī、貞節なるもの）、チャンダー（caṇḍā、獰猛なるもの）である女性（strī）は、幸福で貞節である。

[*33] この 3 種のグナにより顕現した女神と配偶神との組み合わせに関する創造説は、『デーヴィー・マーハートミヤ』の 6 篇の付随書にも説かれ、その関連性が横地氏によって指摘されている [小倉・横地 2000: pp. 271–272]。ただし、『デーヴィー・マーハートミヤ』と異なり、LT では、ヴューハ神との関連が明示され、マハーラクシュミーが 3 種のグナの女神を統括する存在のごとくに言及されている。

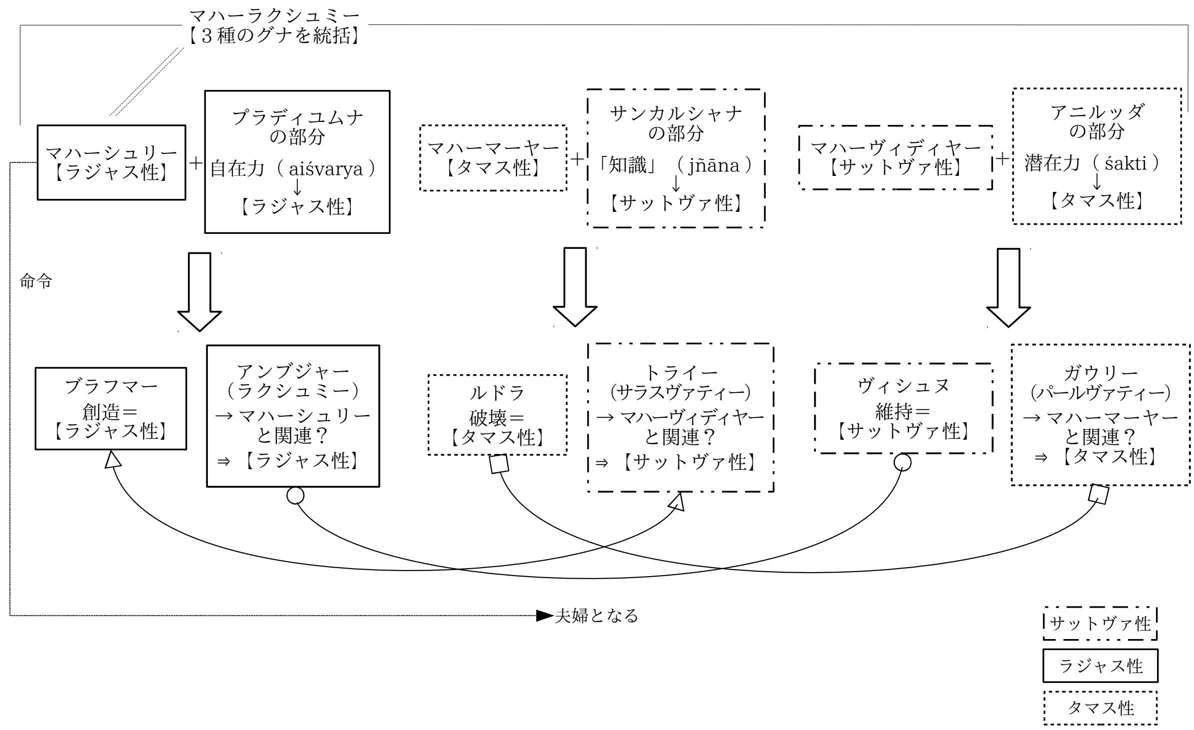
の組み合わせは、一見すると整合性が内容に見える。しかしながら、知識（jñāna）からサットヴァが、自在力（aiśvarya）からラジャスが、潜在力（śakti）からタマスが生起するとされる 4 章の説を参考にし[*34]、ヴューハ神の 6 つのグナを転変する 3 種のグナに置き換えて、女神との関連で考えると、それぞれ、ラジャス―ラジャス、サットヴァ―タマス、タマス―サットヴァとなり、ラジャスが優位となって働いていることが分かる。3 種のグナと創造・維持・破壊との関連については、LT 3.7–8 で、創造においてはラジャスが、維持においてはサットヴァが、還滅においてはタマスがそれぞれ優勢になることが説かれる。そのため、マハーシュリー・ラジャス性から創造神ブラフマー・ラジャス性が生まれ、マハーマーヤー・タマス性から破壊神シヴァ・タマス性が生まれ、マハーヴィディヤー・サットヴァ性から維持神ヴィシュヌ・サットヴァ性が生まれるというように、3 女神それぞれの性質を男性神が受け継いでいるのである[*35]。一方、女性神の異名などを考慮すると、女性神と 3 女神との関連が窺える。すなわち、マハーシュリー（ラジャス性）とシュリー、マハーヴィディヤー（サットヴァ性）とトライー、そして、マハーマーヤー（タマス性）とガウリーである。やや強引ではあるが、それぞれの 3 種のグナを女性神と関連づけ、ヴューハ神と転変する 3 種のグナに対応させてみると、プラディユムナ・ラジャス性とシュリー・ラジャス性、サンカルシャナ・サットヴァ性とトライー・サットヴァ性、アニルッダ・タマス性とガウリー・タマス性、というように符合し、ヴューハ神の部分の性質を女性神が引き継いでいると考えられる。これらをまとめると、図表 3 のようになる。

6　おわりに

以上、LT の創造説とグナに関連する箇所を概観した。グナには大きく分けて、「神的な 6 つのグナ」と「3 つのグナから成るもの」に分けられる。前者は「清浄なる創造」に関連し、後者は「不浄なる創造」に関連する。一見すると規則性がないようであるが、それぞれのグナを引き継ぎ、複雑に融合されていることが分かる。「神的な 6 つのグナ」は、「清浄なる創造」において現れ、最高神、より正確に言えば、無形態の最高存在から現れたラクシュミー・ナーラーヤナの有する神的な属性であり、現象世界の創造とは直接的に関与しない。同じくグナの名を冠する「3 つのグナから成るもの」が、その「不浄な創造」に関与するのである。これらは、サーンキヤ説での 3 種のグナであり、その影響関係は今後の課題となろう。様々な説を融合させていった結果、宇宙論はより長大で複雑になり、全体像の把握は困難を極める。より詳細にかつ関連文献の分析を進め、解明していく必要があろう。

[*34] yat te jñānaṃ purā proktaṃ tat sattvena vivartate /
rajastayā tadaiśvarya(ṃ) śaktiś cāpi tamastayā // LT 4.33
以前にあなた（＝インドラ）に語った「知識」（jñāna）というものが、サットヴァとして転変する。かの「自在力」（aiśvarya）はラジャス性のものとして、そしてまた、「潜在力」（śakti）はタマス性のものとして〔転変する〕。

[*35] この創造・維持・破壊を司る神格が、3 種のグナと関連する例は、*Maitrāyaṇīya Upaniṣad* 5.2 でも同様に見られる。



図表 3　LT 5：3 種のグナと 3 女神の展開

参考文献

Ganguli, Kisari Mohan ed. (1975) *The Mahabharata of Krishna-Dwaipayana Vyasa*, Vol. Vol. IX, Santi Parva part II, New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.

Gonda, Jan (1977) *Medieval religious literature in Sanskrit* in , A history of Indian literature / edited by Jan Gonda, No. v. 2 . Epics and Sanskrit religious literature ; fasc. 1: O. Harrassowitz.

Gupta, Sanjukta (2000) *Lakṣmī Tantra: A Pāñcarātra Text*, Delhi: Motilal Banarsidass.

Krishnamacharya, V. ed. (1959) *Lakṣmī-tantra: A Pāñcarātra Āgama*, Chennai: The Adyar Library and Research Centre.

Matsubara, Mitsunori (1994) *Pāñcarātra Saṃhitās & Early Vaiṣṇava Theology*, Delhi: Motilal Banarsidass.

Rastelli, Marion (2009) “Pāñcarātra,” in Jacobsen, Knut A. ed. *Brill’s Encyclopedia of Hinduism*, Vol. Vol. 3, Leiden: BRILL, pp. 444–457.

Rāmānujācārya, M.D., Friedrich Otto Schrader, and V. Krishnamacharya eds. (1966) *Ahirbudhnya-Saṃhitā of the Pāñcarātrāgama*, Vol. 2 vols. of ALS 4，Adyar？：The Adyar Library and Research Centre, 2nd edition.

Schrader, F. Otto (1916) *Introduction to the Pāñcarātra and the Ahirbudhnya Saṃhitā*, Madras: The Adyar Library and Research Centre.

小倉泰・横地優子 (2000) 『ヒンドゥー教の聖典二篇』，東洋文庫，第 677 号，平凡社.

引田弘道 (1997) 『ヒンドゥータントリズムの研究』，山喜房佛書林.

三澤祐嗣 (2015) 「インド思想における世界構成原理の研究―サーンキヤ思想を中心として―」，博士論文，東洋大学.

——— (2017) 「『ラクシュミー・タントラ』第 5 章訳註 (1)—3 種のグナによる顕現—」，『東洋学研究』，第 54 号, pp. 47–58.

——— (2018) 「『ラクシュミー・タントラ』第 5 章訳註 (2)—マハットとアハンカーラの顕現」，『東洋学研究』，第 55 号.